Osaka University Knowledge Archive

Title	健康と私
Author(s)	藤野, 恒三郎
Citation	makoto. 1986, 56, p. 10-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86012
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

「健　康　と　私」

大阪大学名誉教授
神戸学院大学名誉教授
藤野恒三郎

人生の幸福は健康からはじまる。健康でない人の幸福はあり得ない。

今年の１月、第８０回の誕生日を迎えて、しみじみと往時をかえりみ、如何にこれからを生きるべきかを、しんみりと考えさせられた。実は、中学１年生のとき、急性心不全(?)で父は突然他界、代って妹と弟たちの育成につとめてくれた長兄は、９２歳、生駒で悠々の生活中、８２歳の姉も京都で健在、弟もまたのんびり馬齢を加えるのは当り前の如くである。身長は1.70米、体重は59.5瓩。

時は昭和２０年８月上旬、あの有名なタイービルマ鉄道のビルマ側アパロン兵站病院の病室。不注意からマラリアの再発、高熱はキニーネとアテブリン服用に抗して持続、呻吟のあけくれ。おかゆを食べられずに、おもゆだけをすすり、近くの屋外トイレへ這っていくおのが姿を、死線へ向うのでは！と思った。８月１８日午後、別れていた見習士官と兵士が来て、日本軍降伏を知らせてくれた。１口のご飯を飯盒からわけてもらった。その甘さに驚き喜んだ。しかし、長く使わなかった顎の筋肉がだるくなるのに困った。その翌日から、軍刀を杖にして、死線を後にして辛うじて歩く己を見ることができた。

昭和４０年初夏の頃、健康診断のためのＸ線フィルムで、「胃癌疑い」の宣告を受けた。誤診しないので信頼される学友の親切な言葉であった。「癌とは顕微鏡でみて、細胞の並び方で決めるもの、標本を作って調べて……」と言わざるを得なかった。ＮＨＫの行天良雄さんが、癌の早期発見・早期手術・職場復帰のドキュメンタリーを望んできた。これは、死線に向って進む己が姿の記録になるやも知れない、と思ったがそれを口には出さなかった。

手術室に運び入れられる際の、カメラの音を確かに憶えている。翌朝、酸素テントが除れた時、看護婦さんと執刀者・長田博之博士と受け持ちの新谷五郎博士の、そろった笑顔が現れて、私は生きていることを知った。

ＮＨＫのカメラマンはいない。

病室に落ちついてから、「胃を開いた瞬間、胃癌ではない、小さな胃潰瘍とわかりましたので、ＮＨＫカメラマンは帰ったそうです。」と家内から聞かされた。

退院後、職場復帰までに約３ヶ月静養した。平常生活にもどっても、腹部内臓手術を受けたものは、何等かの異常発生に困惑するもの。急いで食事をすると、直後に、急に腹痛、激しい下痢１回か２回でおさまるが、どの程度いそぐといけないのか、わからずに１０年ほどして、このことはなくなった。

しかし、毎日の便秘には、ほとほと困った。自宅での浣腸は、医師であれば誰れでも楽なこと。旅行中でも必ず浣腸薬を持参の要あり。

ある時、偶然に阪大工学部応用化学教室出身の黄堂慶雲博士が、原生植物・スピルリナ・プラテンシイス *Spirulina platensis* の培養乾燥品スピレンと称する健康食品を提供してくれた。毎食時１０錠あて。

全く、このおかげで、１日１回規則正しく正常排便＝快通、毎朝の苦行は消えた。

７０歳になる前に、テニスを再開。調子が良いので、勝つことを考えないテニス、を認めてもらえると思って、主治医、今の成人病センター総長・石上重行博士の診察を受けた。何か異常発見があったらしくないが「止めておいて…」の提言。正直に従ったおかげで今日があるのでは……。

歩け、歩け……。北支で３ヶ月、ビルマで３５日ほど、長距離を歩いたのを思い出して、歩くのを一つの義務の如く感じている。

頭の訓練のために、何を選ぶか、実に個人差の多いところ。俳句・和歌・謡曲・長唄・ピアノ・バイオリンの類、どうも芸術的センスに、先天的に欠けているものにとっては、読書のみが頭の訓練の方法である。

約100年前に、結核菌とコレラ菌を発見したローベルト・コッホの論文精読によって、古典的医学＝光学顕微鏡的医学の開拓者の心と技術を知ることができた。それに続いて我が国の明治中期に、その最先端医学を、コッホの高弟、四天王の一人・北里柴三郎博士のドイツでの原著論文から、北里博士の精神力を読みとり、夏の暑さを忘れることができた。

現代医学は分子生物学的医学、これは現代人と未来人の医学か。私は、光学顕微鏡的医学の最後の列の一員、ではなかろうか。

以　上